



室蘭工業大学

学術資源アーカイブ

Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive



Hans Carossaの"Geheimnisse des reif en Lebens"に就いて

| | |
|-------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2014-06-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 市川, 勝治 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/10258/3329 |

Hans Carossa の „Geheimnisse des reifen Lebens“ に就いて

市川 勝 治

Über Hans Carossas Roman „Geheimnisse des reifen Lebens“

Katsuharu Ichikawa

Zusammenfassung

Hier in diesem Aufsatz behandle ich den Roman Hans Carossas (1878-1956) „Geheimnisse des reifen Lebens“. Während seine anderen Werke hauptsächlich autobiographisch sind, hat er hier seine eigenen Erlebnisse weit überschritten, und ist auf den tiefsten Grund des Lebens und der Menschenseele, wo fast kein menschliches Wort mehr gälte, abgestiegen. Es ist also sehr schwierig, diesen Roman richtig zu verstehen.

Es gibt keine Entwicklung der besonders romanartigen Handlungen. Die Situation zwischen vier Menschen, d. h., einem Mann, seiner Frau und ihren zwei Freundinnen, ist es, die darin geschildert ist. Das Ganze nimmt die Form der Aufzeichnungen dieses Mannes namens Angermann, der, schon aus dem Amt zurückgetreten, ein ruhiges Leben auf dem Land mit seiner Frau und zwei Katzen führt. Er will eins: Wachen und Schauen, und in Wirklichkeit ist das seine tägliche Tätigkeit. Seine Anschauungen sind sehr tief und erkenntnisvoll. Er scheint mit diesem Anschauen ganz zufrieden zu sein. Aber verläßt er endlich seinen Standpunkt als Anschauer und tritt in bittere Sphäre des Eros hinein. An einer der Freundinnen, Barbara, bekommt er sein Kind.

Was ist das, was ihn triebhaft von innen aus zu dieser Tat verleitet? Dies ist das Thema, das Carossa hier aufgenommen hat. Schematisch darauf zu antworten, würde leicht sein, aber es ist schwer, den wahren Sinn davon herauszufinden. Hier möchte ich diesen Sinn, indem ich in die Seele vier Menschen einblicke, möglichst fehlerfrei aufsuchen.

I

この極めて難解な小説は、読むたびに、その間の心の伸びを私に気付かせて呉れるようである。どんな作品でも、読む者の側から考えれば、そのよう

な役割を持って居るのではあるが、それとは別に、間を置いて読む毎に、こちらの心のひろがり、別の言葉で言えば、年を取る事の重みみたいなものを特に感じさせる作品があるものだ。恐らく、各人それぞれに、そのような作品、或いは作家を持って居る事であろう。Hans Carossa (1878~1956) の „成年の秘密“ (Geheimnisse des reifen Lebens 1936) は、私にとって、正にそのような役割を果たして呉れる作品なのだが、この事は、ただにこの作品に限らず、Carossa の書くものすべてが、私にとってはそうであるらしい。

殆んど自伝的な彼の作品の中で、いわゆる小説らしき体裁をとって居るのは、 „ドクトル・ビュルガーの運命“ (Die Schicksale Doktor Bürgers), „医師ギオン“ (Der Arzt Gion) と、この „成年の秘密“ の三作位のものであるが、前二作の主人公が、作者と同じく医者であり、多分に自伝、自己体験的なものの範囲にとどまって居るのに対して、この作品に於いて、彼ははじめてそれ迄と手法を異にした、本格的な虚構の世界を作り上げた。勿論主人公 Angermann の姿は、そのまま Carossa と重ねてかまわないし、又、Carossa の作品に親しんだものにはなつかしい数々のモチーフが、ここにも通奏低音のようにひびいて居るが、この作品に限っては、主人公がもう医者ではないように、ここに描かれる世界は、作者の体験をはるかに越えて、殆んど言語を絶する生と、人間の心の深みに及んで居る。それ故に、この小説は、それを実感として読みこなすには、誠に難解である。然し、それは作者は勿論承知の上の事である。

殊更に彼は難解な言葉を用いては居ないが、そのつとめて抑えた筆づかいは、本質への我々の接近をなかなか許さぬばかりか、時にそれを拒んでさえ居るようである。この難解な世界に立向う Carossa の誠実さが、この書をおよそ座興に読みうる体ものにはなし得なくして居る。読む者の理解と言う事には Carossa は殆んど配慮して居ないようである。これは作家の不遜ではない。この深淵を描くには、ただ思いをそこに沈めるより外に仕方がないのだ。そして、その暗黒をくぐり抜けて再び帰って来る言葉を、殆んど畏敬しつつ読む者の前に示すより以外には、その言葉の意味をどう受けとるか

は、すべて我々読者にまかされて居るのだ。

この小説には特別筋らしきものはない。一人の男性と三人の女性との相互の関係が描かれるだけで、そしてその関係はすべて、Angermann と若い Barbara に依る新しい生命の誕生と言う一点に向って行く。既に老境に近い男性が、妻以外の若い女性の胎に未来への種子を置く。しかもこの行為が、四人の何れにも背徳の感を抱かせない。むしろそれが彼等の願はしき事として、もう一步すすめて言えば彼等の生の完成として、喜びと期待をもって受けいられるのだ。そして、作者の思いもそれと同じき方向に向って居る。およそ不倫、不徳義の意識は、作者の関心の外である。曖昧な、大人の物わかりのよさでは無論ない。作者はこの出生の事実を背う事に依って、成熟した生の秘密を解きうる——少なくとも描きうると考えて居るのだ。その秘密が何であるか。それを充分の深さに於いて理解するのは、私には到底不可能な事ではあるが、四人の心をたづね乍らくいかでもその深みに降りて見たいと思うのだ。

II

Angermann

この小説は Angermann の手記 (Aufzeichnungen) と言う形で書かれて居る。彼は出生と言う事件の当事者であり、その報告者であり、彼等四人の Situation も、彼の眼で眺められたものである。彼は既に退官して、妻の Cordula と二匹の猫と共に、年金を受けつつ田舎に隠棲して居る男子である。Carossa がこの小説を発表したのは 58 歳の時であるが、Angermann の年齢もそれと同じ程度と見てよいであろう。人生の後半に大きく足を踏み入れた彼は、若さへの同情といく分の羨望を残しながらも、齢を重ねる事の意味を十分に計りうる境地に達して居る。しかもそれはありふれた老年の諦念ではなく、もっともっと frisch な、予感にみちた動的な状態と言ってよいだろう。„長い年月、落着いて外の世界を眺めて来た者のうちには、それぞれに時が積み重なって居る。私たちは成熟し、枯れはじまる。然し死はまだやっ

て来ない。その時こそ、あらゆる経験を超えた彼方に、何かが起こりうるのだ。より高い成育と、より純粋な観照がはじまる。そうだ、ある状態が可能になるらしい。——それが如何なるものかは私にはわからない。ただ朧ろげに感じられるだけだが——まだ太陽が全くは沈まぬのに、既に東天に星が一つ輝いて居る、あの珍しい夕暮れのひとときにも似た状態が“。

(So gibt es in jedem langen Dasein, das beruhigt nach außen blickt, eine Vermehrung der Zeit. Wir werden reif und fangen zu welken an; aber der Tod bleibt noch aus, und nun kann, über alle Erfahrung hin, etwas geschehen: ein höheres Wachstum, eine reinere Schau kann beginnen. Ja, ein Zustand scheint möglich—ich bin weit entfernt, ihn zu kennen, er deutet sich nur an—, ein Zustand, vergleichbar den seltenen Abendminuten, wo schon ein Stern im Osten flimmert, während noch die Sonne nicht ganz versunken ist. S. 291).

彼は既に世間的な営為からは一切退いて居り、出来ればただ神的な事 (das Göttliche)、或いは本源的なもの (das Elementarische) にだけ直接仕いたいと願って居る。然し、その何れもが彼には近寄りがたいものに思われる。そのような彼に残されるのはただ目覚めて、そして観ると言う事だけである。(……, So bleibt nur eines: wachen und schauen. S. 302) 事実、彼はこの観照の業に日々を捧げて居るのであった。この内省と観照だけでも、恐らく „成年の秘密“ という小説は成立ちうるであろう。僅かに散策と読書、草木の手入をし、猫に就いての論文を書こうとしたり、或いは魔法の杖 (Wünschelrute) で地下の泉を探ったり (これは極めて象徴的である) と言う、内にこもった言わば非時代的、非社会的な生活を送って居る Angermann であるが、それだけに彼の眼と心は、一時的なものに曇らされる事なく、内的な深い洞察へと向って居る。そして、神的なものへの近付きを敬虔に断念した彼は、その心を専ら人間とこの地上の世界に向けて居るのだ。

非時代的、非社会的と言っても、それは時代相をとらえる事を作品の主眼にして居ないと言うだけの事で、決して美的、抽象的な思惟の遊びに身を引いてるのではない。その背後にあるのは第一次大戦後、更には第二次大戦直

前のヨーロッパの精神状況であり、自身軍医として参戦した作者の、時代への気づかいに満ちた観察である。そこに現われる Angermann の省察は、それだけで我々の眼を開かせる作者の叡智であり、地味な形に於いてではあるが、時に彼を予見者とも、厳しい時代の批判者ともして居る。その事だけでも、この小説は常に尽きる事のない魅力をもって居る。恐らくそれだけを抜き出しても、一卷の人世智、人間智の書が生まれるであろう。そしてその何れもが、大地の熱で暖められたようなぬくもりを持って居る。たとえ厳しい批判であっても決して意地の悪い所はない。意地悪くなる為には、彼は豊かでありすぎるし、そしてその豊かさは常に彼の心を Humor へと導く。今の論題と関係はないし、この作品の性質上、それ程 Humor の要素は顕著ではないが、Carossa を考える場合、その Humor を忘れてはならないだろう。Humor の精神は、Carossa の大きな特性であり、彼の作品の難解と晦渋さに、決して人智以外と言う不愉快さのつきまとう事のない所以なのだ。Carossa 自身、この精神への自覚とそれへの自信を持って居た事は、„ルーマニヤ日記“ (Rumänisches Tagebuch) や、„指導と信従“ (Führung und Geleit) の控え目な文章にうかがわれる。

その省察が如何なる種類のものであるか。その二、三を見るのも無駄ではあるまい。これだけの叡智と老成を示す Angermann が、敢て常識外の体験に赴くのだが、それを知る時、我々は一層、人間の魂の Dynamismus に、怖れにも近い驚きを覚えるのである。この、分別から不徳義に到る振幅のひろさ、そしてその何れもが、生の奥深き所に到らんとする人間の努力である事を作者は示したかったのだ。何れも大地の底の同じ根から生じた事であった。例えば Angermann は罪に就いてこう書く。„少年の日以来、私には親しいものであった罪、人間の偉大にして暗黒な伴侶たる罪よ。私は今後もお前を否定しはしないだろう。二つの法則がぶつかり合う微妙な一線の上に立って、お前を避けよとする者は、何時かお前に追いつかれるのだ。しかも大ていはいはもっと怖しい形で。お前が我々の事を忘れて居るらしい平穏な日々は快い。然し、我々この地上に結びつけられたものは、お前が我々の心の中に

沈めた無限の憂苦に依って、はじめて新たな悟りと新たな尊厳に到達しうるのだ“。

(Schuld, große dunkle Gefährtin des Menschen, mir vertraut seit Kindheitstagen, ich werde dich auch diesmal nicht verleugnen. Wer dir ausweichen will auf der feinen Linie, wo zwei Gesetze aneinander stoßen, den holst du eines Tages dennoch ein und meistens in schrecklicherer Form. Angenehm sind beruhigte Jahre, wo du uns zu vergessen scheinst; aber zu neuer Erleuchtung und neuer Würde gelangen wir Erdgebundenen doch nur durch die unendliche Sorge, die du in uns einsenkst. S. 334).

自分が Barbara の願うものは、必ず叶えてやるだろうと言う事を既に確信してこの罪の省察は重い。これが人間の、Angermann に則して言えば、成年の決心であり、賭けなのかも知れない。時としてはただの没落に向う事もありえよう。しかもなを、彼は罪の道へと決断をするのである。

或いは、彼は自分の年代をこうとらえる。„多くの時代の書から鳴りひびく大いなる要請、おびやかすような命令は、若い人々を戦いの場へと呼ぶ。然し、私たちの年齢になると、魂は別の力に依って形づくられる。最早、意見を制するに意見をもってしようとはしない。自分を愛して呉れる人々にさからって、永久に自己の正しさを守ろうとするのは、貧しい事に思われるのだ。

Die großen Forderungen, die drohenden Befehle, die aus manchem Zeitbuch tönen, sie rufen wohl die Jugend auf den Plan; in unseren Jahren wird aber die Seele von anderen Mächten geformt. Man will nicht mehr Meinung mit Meinung bekämpfen; man findet es armselig, ewig recht haben zu wollen gegen die, die einen lieben. S. 378).

現代、このように若年を侮らず、みづから卑下する事なく、淡々と自己の年代を主張出来る大人が居るであろうか。或る意味では危険な言葉である。然し、如何なる意見も、ただそれだけでは空しいものと言う実感が底にあるのでなければ、何の力も持ち得ないのではなかろうか。主義を守るもよい。然し、ささやかな主義にこだわって、大きな愛を忘れてしまうのは愚かな業

である。

Angermann は Ilias を読みながら、戦場で出会ったオーストリアの将校の事を思い出す。この将校は、眼の前に詩集を開き、愛想よく客に茶をすすめながら、時々望遠鏡で敵陣を眺めて居るが、遂に敵兵の一団を発見するや、電話で砲撃を命じ、再び又何事もなかったように楽しそうに自分の妻子の話をするのだ。彼の軍服には血のしみ一滴ついて居らぬ。恐らくその心にも何のしみもついて居ない事であろう。それと比べて Achilles はどうであろうか。彼は友の死を悲しんで荒れ狂う。彼は仆れた敵の英雄 Hektor に悪罵、呪詛の限りをつくすのだ。犬の餌食にしないで呉れとたのむ Hektor の願いをも拒絶する。しかも、その Achilles は、悲しみと怒りをすべて出しつくしてしまえば、Hektor の老父 Priamos の願いを聞き入れ、共に涙にくれて、戦いを休んで死者の魂を祭るのである。Angermann は言う。„誇らしげに、壮大に、技術は我々の小さな世界を占領した。然し、魂の焰は望遠鏡で眺めるとこまいところはよく見分けられるが、輝く力は減じてしまう星のように、だんだんと燃え方が弱くなって行くようである。あの古代に於いては、死を賭けて挑戦し合う二人の戦士が、如何にお互いを神の如く、神に似たものの如く思い合う事がしばしばであったか。たとえそれが敵の顔であっても、人間の顔の尊厳に対する感情はかくも強かったのだ“。

(Stolz und groß bemächtigt sich die Technik unserer kleinen Welt; die Flamme der Seele aber scheint schwächer und schwächer zu brennen, so wie ein Planet, im Fernrohr betrachtet, wohl mehr Einzelheiten erkennen läßt, aber an Leuchtkraft abnimmt. Wie oft in jener Frühzeit geschieht es, daß zwei Krieger, die sich den tödlichen Kampf ansagen, einander noch als göttlich oder götterreich bezeichnen! So stark war das Gefühl für die Würde des Menschengesichts, auch wenn ein Feind es trug. S. 336-337.)

この時代批判を古いと見なすもかまわぬ。恐らく、Carossa を完全に過去の作家と考える人達も多いに違いない。然し、現代人の口ぎたないののしりも、みじめな愚痴も、結局語るのはこの事ではないだろうか。因に、これら

は Carossa の実際の体験である。彼は、望遠鏡を借りて周囲を眺めまわしている中に、偶然敵兵を見つけるが、到頭それを誰にも知らせずに終わってしまうのだ。彼は何人かの人間の生命を、自分の掌の中に感じて胸がどきどきして来る。戦争と言う巨大な歯車の中で、これ位の善意がどれ程の意味を持ちうるかは、おのづから別の問題である。Carossa はさりげない調子で書いて居るが、非常に困難な選択の前に立たされた事であろう。

或いは、篇中しばしば現われる九人の小さな戦鬼達。このミニ・ナチ連中は、全身に時代の息吹きを浴びて、今は殆んど Kobold のように野や山に出没し、おしゃべりをしながら行く女生徒の列には見向きもせず、太鼓を鳴らし鬨の声をあげて居るが、彼等がやがて如何なる呼び声に導かれて行くか、Angermann は気づかないながら眺めて居る。彼等を待って居る未来はどう言うものであろうか。何十万の人間を帰らぬものとした戦争の嵐が、彼等をも待ちうけて居るのであろうか。やがては戦争など許容しない困難な課題が、人類に与えられるかも知れない。その時、新しき智慧が輝き出る事であろう。然し今、川の向う岸に敵を見出して挑戦ののしり声をあげる彼等は、熟し切る前に夏の嵐に吹き落されるのだ。収穫を得るのは遙か次の次の世代であろう。然しなお、Angermann は、このほろぶべき次の世代に、遠き未来への人類の運命を托すのだ。„何人も内深く、厳しき沈黙につつまれた細胞を守れ。この時、たとえ書かれる事はなくとも、来るべき日を養う塩の糧である思想が、苦悩と幸福の中から成育して来るであろう。暫らくの間は、子供等よ、安んじてお前たちの盟約の裡にとどまれ。そして、それを重大な事と考えよ“。

(Bewahre sich jeder tief innen eine streng umschwiegene Zelle! Da mögen aus Leiden und Glück die Gedanken erwachsen, die das Nährsalz der Zukunft sind, auch wenn sie niemals aufgeschrieben werden! Einstweilen, Kinder, haltet euch getrost in euren Bündeln und macht es euch schwer! S. 408).

この張った調子を聞き落してはならない。恐らくは、虚無と無拘束に陥り

がちな戦後世界への、作者の痛切な呼びかけであったろう。残念ながら、ドイツに於いてそれへの答は、Nazism と言う形で一つの結実を見せて行くが、それは Carossa の願いと別な事である。この小説の主題は、単なる観照の場を超えた Angermann に依る Barbara の受胎と言う事である。そしてその行為の真の意味が、Angermann の体験として、彼の魂の奥底に照射を当てる事に依って解明されて居るのであり、その所がどうか実感としてとらえられない限り、この小説の „秘密“ はわからないのであるが、同時に又、この次代への愛情と憂慮に満ちた眼ざしが、Angermann に重なった Carossa のまことの願いであり、この書を単なる個人の手記風なものに終らせて居ないのだ。

かくも智慮に富み、平穩に世を経て来た Angermann が、今やその観照の立場を捨てるに到る。既に老年に近い彼を内からそそのかす何かがあったのだ。そして彼は、その声に耳傾けて、誠実な人間に取って、最も切実である筈の Eros の体験へと踏み入るのである。彼の前に現われた若い陶器工場の持主である Barbara に依って、わが子を得るのである。それが単なる愛欲の問題でない事は、直ちに理解されるであろう。彼は妻 Cordula に不満を持つのではない。これ迄の結婚生活に悔いを抱いて居るのではない。しのこした青春の業があるわけでもなさそうである。むしろ彼がそれを事として居る内省と観照の生活は、彼の十全の過去の結果とも言えよう。ここに近代の姦通小説、大人の心理小説に類似したものを見出そうと考えるなら、それは全くの誤りである。結局は、Angermann の内部の問題なのだ。彼は妻 Cordula, Barbara, その友 Sibylle の三人の女性を観察する。彼女等相互の関係、或いは自分も含めて四人の位置関係を努めて冷静に観察して居る。勿論、そこに三人の女性それぞれの比較は行なわれるが、それは優劣好悪の序列をつける為のものではない。彼は、彼女達がそれぞれの異なる性質でもって、彼の辿る暗い道を照らし出して呉れて居る事を感じて、それを貴いものに思っているのだ。何故に、この省察にとどまって居てはいけないのか。その契機が、諒解しあえるものかどうかは知らぬ。然し、彼は Barbara と結ばれる事にな

るのだ。しかもそれに依って四人の関係が、内面的にも外見的にも、いささかも崩れる事はない。むしろ、それが当然の事、更に進んで願わしき事として、他の二人からもひそかに懲懲されるのである。然し、それが Angermann の行為を無条件に正当化するものではあるまい。彼は罪の何なるかを知って居る。それにもかかわらず、彼は Barbara への接近を、妻 Cordula への裏切りと考えて悔いる事は一切しないのだ。随分虫のいい話とも考えられようが、それは、Angermann を動かすものが、やがて悔いるべき情熱などと言うものではないからなのである。

彼が為したのは、決して偶然的な事ではない。決断して行なったのである。それは熟慮し、納得してと言う意味ではない。世間風な考慮から引き出される答はおのづから定まって居るであろう。決断と言う程気負い立ったものでなく、必然的な生の流として、彼は Eros の世界に身をまかせたのだ。何故に。必ず生ずるこの疑問に答える事は、容易でもあり、困難でもある。もともと俗世間の常識を満足させる答の与えられる筈のない問題なのだ。ただ、手がかりとなるのは、彼の目指すのが、単に Barbara との情事ではなくて、新しき生命の誕生と言う方向にあると言う事である。それはむしろ Barbara の願いを満たす事であった。男性の道を助けるのが女性の業である如く、女性の願いを満たすのが男性の業であるかも知れない。然し矢張り、俗に従えば、それは Angermann にとって越えて行ってはならぬ筈のものである。しかもなお、彼は、Barbara が、自分の従兄弟である光輪蒐集氣違いの為に、収入の道を講じようと、女学生のように人差指をペン軸に直角に立てて、細々とした計画を紙に書き込んで行く熱心さを眺めながら、こう考えるのだ。„……こうした事のすべては、以前ならきっと私を笑わせてしまったに違いない。——今日に限っては、どうして、私はこんなに素直な気持ちで眺めて居られるのだろう。一体彼女の何処が気に入るのだろう。私にはまだよくわからない。然し、私は、たとえすべての世間がそれを不道德な事と見なそうとも、彼女が私に望むところのものはすべて、何のためらいもなく叶えてやるだろうと言う事を、自分にはっきり承知させて置かねばなるまい。

(……, dies alles hätte mich früher gewiß zum Lachen gebracht—— warum sah ich heute so anständig zu? Und was gefällt mir eigentlich an ihr? Ich weiß es noch nicht recht; aber daß ich jeden Wunsch, den sie an mich hätte, unbedenklich erfüllen würde, auch wenn die ganze übrige Welt es frevelhaft hielte, darüber muß ich mir wohl im klaren sein. S. 324).

随分勝手な理屈とも言えよう。然し、Angermann 自身にすら、何故に Barbara を眺めてこのような感想を得るかは、——少なくとも地表の思惟だけでは、判然としない。然し、彼は大地の底深くで、Barbara との結合を感じとって居るのだ。その声に耳を傾けて従うか、或いは聞くべからざるものとして克服するか。時にその決断は善悪を越えて困難な問題であろう。更にこのいわれのなさを、男女の愛欲一般に共通する機微とのみ考えるも可能である。然し、Angermann はこの識闕下の子感を、敢て確信の世界へ移して、Barbara との地上での結合へと向うのである。妻を捨てて他の女性に赴くのは、既に老年に近い Angermann にとっては容易ならぬ事であり、外見的には極めて不実な裏切りである。彼の反省は、当然、罪の自覚へと向っては居るが、しかもなお、そこから引き下る事は全く考えて居ない。世間を無視する程 Angermann は恣意的な人間ではない。逆に、極めて分別に富んだ人間である。その彼に、敢てこの不道徳を選ばしめる程力あるものが一体何であろうか。そこに思いを到さずにこの作品を読んでも無益である。図式的に解答を出す事は簡単かも知れぬ。然し、それをわが言葉として述べ得る為には、我々も Angermann と同じく、いく度もいく度も、魂を大地の奥底に沈めねばならぬように思われる。

III

Barbara

他の二人の女性、Sibylle と Cordula が、それぞれに現実と間を置いた、独自の世界に住して居るに対して、Barbara は、およそ対蹠的に、飽く迄も現実そのものと緊密に結びついた实际的、活動的な女性である。彼女の魅力

は他の二人と違って、この現実への lebendig な対応のしかた、いや、むしろ彼女自身がそのまま現実を具現して居る所に存する。„Barbara が、ごく手近な实际的な事を越えて語ると言う事はめったにない。彼女は世界の出来事をも余り気にかけて居ないようだ。それにも拘わらず、彼女の前に居ると、彼女の心に安住する者は、独自の物の見方をするようになり、恐らくは、共同社会への新しい道を見出すに違いない、と言う思いにおそわれる事が間々あるのだ“。

(Von Barbara kommt selten eine Äußerung, die sich über die nächstliegenden Sachlichkeiten erhebt; auch scheint sie wenig nach den Weltereignissen zu fragen. Dennoch kann mich in ihrer Gegenwart zuweilen die Empfindung überfallen, als müßte einer, der an ihrem Herzen ruhte, auf eine eigene Art sehend werden, möglicherweise auch einen neuen Zugang zur Gemeinschaft finden. S. 329).

Barbara のユニークさは、確かに瑣事に終始して、しかも瑣事に墮してしまわぬ所にある。彼女は、その手でたしかめられる以外の世界に住まず、同時に自分の住む世界一切を、自分の手でたしかめなければ満足しない。それ故に、Barbara の世界は身近なものに限定されるが、その事は決して彼女を狭小な人間にするのではなくて、逆に彼女の行動の豊かさを形成する。彼女はいきなり永遠を求めたりはしまい。彼女は先ず計算し、判断し、与え、守り、現実の秩序を保とうとする。彼女にとって精神とは行動に外ならない。

そして、彼女のこの Realität の感覚は、彼女に集積した祖先代々の叡智なのである。この代々受けついで来たと言う土着感が、Barbara に、自覚と自信と責任の感情を植えつける。そしてその顔に、子供々々とした世間見ずの所と、百姓風な角張った所を与え、横から眺めれば女中のようであるが、正面からは女主人と言う輪郭を与えるのだ。„卑小な画家が、彼女を描きたいと思ったら簡単に描き上げるだろう。然し、偉大な画家なら筆を投げてしまいかも知れない。何故なら、その為には、自然がそれをもって種々雑多な祖先祖妣から、絶えず権能ある、しかも恣意の感を我々には決して抱かせぬ、統一した姿を織り上げる太初の秘法を会得せねばならぬであろう“。

(Ein unbedeutender Künstler, der sie malen wollte, täte sich leicht; ein großer aber würde verzweifeln; denn er müßte das urgeheime Verfahren meistern, womit Natur aus allerverschiedensten Ahnen und Ahninnen immer wieder eine neue gültige Einheit zusammenwebt, von der man fühlt: hier ist keine Willkür. S. 300).

Barbara は、父祖の代から譲られた農場と陶器工場を経営して居る 30 歳に近い処女である。兄が居るが、彼は長年外国に行って帰って来ない。彼女は自分の工場をうまく経営して居るが、それは彼女が単に有能な経営者としての才を持つだけでなく、それに依って、受けついで父祖の財を守ると同時に、多くの人々の生活を保証しなければならぬ義務と責任の自覚に依るのである。むしろ経営の才は、それに依って与えられたと言ってもよいであろう。身一つには何の贅をこらさず、お茶に入れる砂糖すら手許に置かぬきびしくも簡素な生活は、偏に他人への施しと奉仕を充分に行なう事を得んが為である。村人の誰もが、必ず彼女に何かを負うて居る。

Barbara の善意は、時に殆んど押しつけがましくさえあるようだ。彼女は Angermann の古い家のいたみや雨もりを知ると、直ちにひとりで計算をして、その修理を申し出るのだ。相手に有無を言わせず事を運んで行く彼女の行動の瀟灑さは、殆んど目を見はらせる程に断乎として居り、魅力に富んだものだが、この他人への施しは、Angermann に言わせると、彼女の堅固な理性をおびやかしかねないたった一つの病であるらしい。だから彼女に愛されてる人間は、彼女の前で自分の望みを洩らす事をつつしまねばならない。彼女は何時も聞き流したようなふりをして、ひそかにその願いを叶えてしまう。たとえば不用意に、Angermann が双眼鏡を貸して欲しいと言う。生憎、Barbara の家にはない。あわてた Angermann が、どれ程口実を探して、レンズの当てにならぬ事を説いても無駄である。2 時間後には Zeiß 宛の手紙が送られてしまうのだ。

言わば男まさりの Barbara が独身であったのは不思議ではない。然し、彼女は、はじめから結婚を考えないのではなかった。彼女の言葉で言えば、„結婚したいのは山々だが“ (Natürlich würde ich mich gern verheiraten. S.

311) 世間から離れすぎて居り、自由な時間がないので未だに意に叶う男性に会わないのだ。何人かの求婚者があっても、彼女にはみな不真面目な男性のように思われた。その Barbara が、今や Angermann に近付くのである。勿論、妻もあり、父親ほども年の多い彼に、このように接近するのは、尋常の事ではない。然し、もともと Barbara が結婚を考える場合、それは並みの意味での結婚とはいささか趣きを異にして居る。勿論、一人の若い女性として、個人的な恋としての結婚を望まぬ事はあるまい。だが Barbara にとってはそれと同時に、彼女の結婚は彼女が守るべき陶器工場や、村の人々の要請にこたえるものでもなければならぬ。そして、この事は彼女が確実に自分の子供に財産を譲って行く事に依って達成される。それ故彼女にとっては、結婚生活そのものより、嗣子を得る事が重要なのだ。これを私財保有本能の Egoismus と考えたければそれでもよからう。然し、Barbara の日々の生活の Kontext の中で眺めるなら、この願いはそれとは全く別のものである事がわかる。飽く迄も、可視的なものの上に立って判断する彼女にとって、自分の願いの深い意味は自覚されまい。守り伝える事の真の意味を、彼女自身は識る事がないであろう。彼女は大地の業を、自分のしなければならぬ仕事として、現実に対する義務として引き受ける事を願って居るのだ。

然し、それだからと言って、どんな男性を選んでもいいとは、彼女の女性が許さない。同時に又、Angermann をこれ迄に出会った中で、最も信頼の置ける男性と思ったにしても、彼に依って子供を生む事は、本来の社会的な倫理感からすれば許されない筈である。しかもなお、彼女は敢てそれを行なうのである。それが当然の事、むしろ必然の事として、彼女は Angermann を抱擁する。

不道德の思いを抜きに、子供を生みたいと願うのは、Barbara にとって難しい事ではないのだ。何故なら、たとえそれが結婚以外の形で行なわれるにしても、彼女は自分がしなければならぬ事をし、又自分がする事は、しなければならぬ事であると言う事をよく知ってるし、自分を知ってる者達も、この事をよく知ってるのを確信して居るからだ。彼女が自分の村を見渡したが

ら Angermann に語る言葉は感動的でさえある。 „どの家でも子供達の一人は、私が名付け親になってやって居ます。そして、工場で働いて居る者達も、何かの時には私がついて居ると言う事を知って居ます。兄はフランスから帰って参りませんので、何百人かの人間にパンを与えてやれる事が、私の運命になってしまつて居るのです。この工場が、何時か人手に渡る事を望む者など、彼等の中には一人も居りませんでしょう。そして、このすべてのものが、当然譲られてよい娘か、男の子を何時か私が生んだとしても、この辺の人達が私をさげすむかも知れぬなどと、あなたはお考えになりますでしょうか。いいえ、皆は私をよく知って居ります。私のする事は、当然しなければならぬ事、私が真剣に願つて居る事だけだと言うのを、人々は知って居る筈です。私はこの土地を離れようとは思いません。一生この土地の上で生き、何時かはこの土地の下で眠る事でしょう“。

(„In jedem Haus ist einer der Sprößlinge mein Patenkind, und wer in der Fabrik arbeitet, der weiß, daß ich im Notfall für ihn da bin. Mein Bruder ist aus Frankreich nicht heimgekommen, und so bleibt es mein Schicksal, daß ich einigen hundert Menschen Brot geben kann. Keiner von denen würde wünschen, daß der Besitz einmal in fremde Hände fiel. Und glauben Sie, man dächte hier geringer von mir, wenn eines Tages ein Töchterchen da wäre oder ein Sohn, dem das Ganze rechtmäßig zukäme? Die Leute kennen mich; sie wissen, daß ich nur tue, was ich muß und was ich ernstlich will. Über diesen Boden aber tracht ich nicht hinaus; auf ihm werd ich wohl immer leben und später einmal in ihm ruhen.“ S. 314)

これを Barbara の Angermann への求婚と見なすのはうがちすぎだが、少なくとも、こう語る事で彼女は意識せぬままに、その心を彼の中に移して居る。それと同じ事を、Angermann は別の形で、もっと深い所で観察して居る。 „家をとりにまく広い土地はすべて Barbara の地所である。——だけど何故彼女のまわりの空気には、貧しさに似たものが感じうるような気がするのだろう。それにくらべると自分が富んで居ると思われる程だ。多分、それは年齢の違いから来るものだろう。40 を過ぎてはじめて、人は大小を問わ

ず、地上の財産を真に所有するようになる。……Barbaraにとってこれまで、財産と言うものの最も深い意味は、その友 Sibylle の世界の独立を保つ事に外ならぬように思われる。それだけでもかなりの事ではあるが、まだ充分ではない。多分、彼女が自分は何であり、彼女に属してるものが何であるかを知る為には、彼女自身母たる事を実際に必要とするだろう“。

(In weitem Umkreis um das Haus ist alles Barbaras Grund und Boden—warum glaubt man doch manchmal etwas wie Armut in ihrer Sphäre zu spüren, so daß man sich daneben selbst als reich empfindet? Wahrscheinlich kommt es vom Altersunterschied. Nach dem vierzigsten Jahr fängt man an, sein irdisches Eigentum, sei es klein oder groß, wahrhaft zu besitzen……und für Barbara scheint bisher sein tiefster Sinn kein anderer zu sein, als daß er die Welt der Freundin unabhängig erhält. Das ist viel, aber doch nicht genug. Vielleicht bedarf sie wirklich der Mutterschaft, um inne zu werden, wer sie selbst ist und was ihr angehört. S. 341).

恐らくこの Angermann の観察は正しいであろう。然し彼が、Barbara を補って、その子の父になる行為は、これらの感想とは別に Angermann 自身の問題である。Barbara の側から見れば、彼女は Angermann に、ただに自らを托すのではなく、守り伝える者としての子供を生む業への協力を求めるのだ。この不倫は、Barbaraにとって、およそ罪の意識の入りこむ余地のない、代々を伝える彼女の生の流れに、殆んど必然的なものとして生じて来る事なのであった。彼女の現実の原理は、社会的な慣習など無視する事を、自らに許す程に完璧なものであると言ってよからう。それ故、彼女は Angermann の妻 Cordula に対しても、いささかなりとも顔をそむける事をしない。それ所か、むしろ Cordula の信頼に応えたと感じて居るとさえ思われる節があるのだ。Angermann の一寸した腹立ちに対して彼女は言う。„あなたは、私を御存知ないのね。Cordulaの方が、あなたよりよく知って居て呉れますわ“。(„Du kennst mich nicht; Cordula kennt mich besser als du!“ S. 418) 思わず口をつくこの言葉は、Barbaraよりも、むしろ Cordula の姿をはっきり示して居るものだが、Barbaraにとって Cordulaは、自分の

愛する男性の妻ではなくて、自分の業を嘉して、更にその業を全からしめる男性を示して呉れた導き手なのだ。勝手な話と云ってしまえばそれ迄だが、勿論 Carossa は、そんな事は充分承知の上で書いて居るのである。彼は真の意味での地上の財の所有と言う事を言いたかったのだ。そしてそれが、Barbara と言う女性にとって、受胎と言う行為で完全なものになる事を。地上への結びつきが、そのまま永遠的なものにつらなる秘蹟を。

従って、Barbara は他人の夫を奪うと言う形で、Angermann を所有したいと願うのではない。出生が行なわれたら、彼女は又、以前の平静な理性的な支配者に戻るであろう。そして生まれ出た子供を、自分と Angermann の子と言うだけでなく、Sibylle と Cordula の子、更には彼女のかかわるすべての人間の子として守り育てて行く事であろう。

IV

Sibylle

Barbara の現実的精神は、それだけで充分な強さを持ちうるが、それはややもすれば卑近に止まるおそれもあろう。その時常に、彼女のこの此岸性を補うのが、彼女の友 Sibylle である。三人の女性の中で、Sibylle が最も近付き難い厳しさを持って居る。彼女は、Barbara が現実そのものであるに対して、精神そのものと言ってよいであろう。しかもその精神は、Cordula のそのように、言わば非現実の世界に飛翔を行なえる軽やかさを持ち合わせて居ない。彼女は何のなづむ所なく、その精神性を糧にして、おのづからに平和を見出し得る人間ではなかった。Sibylle はこの地上のあらゆる痛苦を経て——体験と言う意味ではない——漸くに、精神の自由を獲得せんとして居る女性である。

その痛苦が何であったかは、はっきりしないが、おそらくは少女の潔癖から発した、彼女の極度の純粹さの故であるらしい。何時の頃からは、彼女はこの世の善き事は認め得ず、反対に醜悪さだけが心から消え去らぬと言う状態になってしまう。そして、しきりに自殺を思うようになる。Sibylle の姉

妹の一人も、彼女と同じような眼を持ち、遂にはこれと言う理由もなく、自らの命を断ってしまったと言う。恐らく Sibylle は、対抗し得る力を持たぬ中に、魂の奥底をのぞき込むことを強いられる、あの選ばれた者達の一であったのだ。一步誤れば、そのままほろびる事であろう。然し、彼女はその強い克己心の故に、徐々に自己の苦悩の真因を突きとめ、漸く恢復への道を見出し得たのである。

彼女の語る所に依ると、その治癒は Barbara の力強い助けと、動物達のおかげであると言う。Barbara は確かに自分の行なう事を心得ては居る。然し、彼女は、それがもっと高い意味に於いて、如何なるものであるかを知らない。彼女は、超時空的な母性をも、意識としては、現実の要請と言う事で計るのだ。Barbara は自分自身の深部に降りて行く事はしない。それが彼女の強さでもあるわけだが、同時にその見かけの強さからは感じられぬもろさも、そこに胚胎して居る。彼女の行為が飽くまでも現実に即して居ながら、それを越えて深い意味を帯びる為には、Sibylle の力を借りねばならないのだ。Barbara はその事をはっきり知って居る。自分の堅固さが、結局基底に於いて Sibylle という強い根につながってる故なる事を知って、それに感謝して居るのだ。自己のあかしを立てて呉れるのが Sibylle なのである。それ故に、常には命令する事に慣れてる Barbara も、Sibylle にだけは殆んど宗教的な畏敬を捧げて居るのである。

然し、負うて居るのは、Barbara の方だけではない。この確実な、自在に現実を取りさばいて行く Barbara の力こそ、又、Sibylle の大きな支えになって居るのだ。Sibylle は精神そのものであると言った。然し、彼女は自己の精神性だけで自足出来る人間でもない。彼女の苦悩は、その精神性だけに逃れ切れぬ故なのである。精神を現実に優位させて自らを救うのは、それ程難しい事ではないであろう。恐らく、苦しいのは自己の精神性を現実に具現し得るかどうかと言う事である。Sibylle の苦悩もそこにあるのだ。その意味で彼女は、智の人であると同時に、矢張り地の人でもあるのであり、篇中、随所に見られる彼女への敬意は、彼女のこの至難の道に対して捧げられるも

のなのである。そして、Sibylleにとって、この至難の業を助けて呉れるのが Barbara なのである。Sibylle は、自分の思惟の純粹さが、Barbara の行為の自在さに実を結ぶのを感じて居るのだ。自分がただの根に終らず、地上での開花結実を、Barbara に於いて見出しうる事を、Sibylle は Barbara に謝して居る。Sibylle が Barbara を導くと言って差支えないが、彼女は又、導かれるものの地上的感覚と、善行への意志に依って、更に導きのともしびに火を点ずる事が出来るのもである。

Sibylle は、日々動物の世話にあけて居るが、それは単に愛玩の犬や猫を相手にするのではない。農婦の鎌に傷ついてふるえる兎、遂に人間の手から食を与えられる事を拒んで飢死する孤高な鷹、眠ってる所を赤蟻に襲われて樹下に墜落した蝙蝠、最後まで人に慣れる事なく射殺されるあな熊等々である。恐らく彼女は、猟師に追わたれ熊でも、手負いの獅子にでも、おそれず手を差しのべる事であろう。然し、現代は聖 Hieronymus の時代ではない。彼女は常に世話をする動物達に咬まれ、引かれ、傷の絶間がないのだ。然し、彼女は自分の世界を、この動物圏にかぎる事に依って、嘗ての忌はしき、人間の嘘偽、汚濁、醜悪の像を一つ一つ消して行く事が出来たのだと言う。

彼女のこのような動物への対し方は独特である。それは愛情と言うよりもむしろ憐憫である。或いは讚嘆である。彼女は常に危険の運命にさらされて居るものに、心の奥底からの同情を抱いて居るに違いない。それは彼女自身が、絶望と言う危機をくぐり抜けくぐり抜け、漸く明るい所に出ようとして居るからに外ならない。動物は意識せず Sibylle と同じ道を歩く同行者なのだ。物言わぬだけにその悲痛さは一層であるに違いない。勿論彼等の苦痛と苦難は、主として肉体的なものに限定さるだろうが、鎌に切られて死ぬ兎は、矢張りその眼に絶望の思いをやどし、狭い金網の中で飢えて死ぬ鷹には、決して背じようとはせぬ怒りと誇りの姿が認められる。この危機の運命、それこそが Sibylle 自身の選んだ運命であった。動物は、その運命に従うにしろ逆うにしろ、決して運命そのものに文句を言う事はない。簡単に言うと懸命

に生きて居るのだ。それはいじらしくも、雄々しくも見えるであろう。そして崇高でさえあるのだ。恐らくそこには、既に久しく人間の忘れ去ってしまった生の本質がひそんで居るに違いない。この動物達の純粋さに、Sibylle は嘗て自分の失った人間への確信の代償を見出したのである。それ故に、たやすく人間に馴れ親しみ、人間に甘え、人間に忠実な動物は、彼女の動物世界では、上位に置かれない。むしろ人間を拒むか、人間にしいたげられるものに彼女の同情は向う。人間を悪と断じて居るのではない。然し矢張り彼女は人間の悪に絶望して居るのだ。Sibylle は人間への信頼を得たいと願って、現実の人間から得るのは苦い絶望ばかりである。彼女の眼に、人間は本源的な活力を失って、余りにも稀薄なものとしか映らない。厳しさが足りないのだ。激しさが。„私が猫の相手をしたら、それはきっとライオンになってしまいうに違いありません“。(Wenn ich mich mit einer Katze abgeben sollte, so müßte es schon gleich ein Löwe sein.“ S. 321) と Sibylle は言うが、正にその通りであろう。この秘められた気性のはげしさが、彼女をして、味の薄い人間界への絶望を抱かせるのだが、同時に、その絶望を他に負わせようとはしない心の高さをも生み出すのだ。むしろ彼女は、この絶望を自分の罪と感じて居る。看護する動物達に咬まれ、引かかれて流す血は、恐らく彼女の罪なき贖罪であったろう。そしてこの贖罪に依って、彼女は徐々に、失った人間性への確信を取り戻しつつあるのだ。Sibylle を取り巻く動物圏は、一見、現実からは大きく離れて居ようではあるが、それは飽く迄も外見上の事であって、本来はこの現実の人間界を支える最も底の部分を受持って居ると言ってもよいであろう。Sibylle が一人で馬に騎って行く時、好んで最も危険な地方に赴くのも、彼女がそれに依って動物圏にとどまりうる資格を得る為であるし、純粋な生を示して呉れる動物への謝意でもあるのだ。彼女は幾度も幾度も、その心だけではなく、肉体をも危機にさらす事に依って聖化されて行くのだ。Barbara に言わせると、„昔なら、聖女か英雄になって居たかも知れない女性である“。(In früheren Jahrhunderten wäre sie eine Heilige geworden oder eine Heldin. S. 419).

然し、人生の虚像を消去して行くには、必ずその実像をも失って行く代償を支払わねばならぬに違いない。Sibylle が純粹であればあるだけ猶更そうである。彼女は善き果実だけを拾おうとはするまい。従って、彼女が地上でたどる道は、絶対的な自制と、感情の統禦に依る孤独と、生と死の克服である。一切を曇りなき眼で眺め、しかも一切に縁を結ばぬのである。彼女は動物を飼い、世話をするが、決してそれに依って精神の自由を失う迄には、動物に親しむと言う事はない。傷ついた動物も、目のあかぬ中に親を失った動物も、やがて癒え、独りで生きて行ける迄に成長したなら、再び又、山や森に放たれるのだ。彼女は、動物への憐みを通して、人間に失った愛を恢復した。然し彼女は、その愛がこの世へのきづなになる事を肯おうとはしない。彼女が愛を行ないうるのは、絶対的な魂の孤独の場でなければならない。これを単なる高踏と見なしては誤りである。個人心内の純粹な苦悩は恣意とは別物である。それは遂に個人の心以上に出る事はなくとも、かかわる所は人間すべてなのだ。

Angermann には、自身魂の奥底を歩んで来た Sibylle が、彼が迷妄の道に墮ち込んで居るのを識ってるように思われる。彼は、彼女を通じて神托を聞き度いと願う。因に Sibylle とは古代の巫女の事であり、作者がこの女性に Sibylle とする名を与えたのは、勿論偶然ではあるまい。彼女はその名の通り Wahrsagerin であると同時に Wahrheitssagerin でもあるのだ。然し、Angermann は、彼女が決して、彼を迷いの道から救い出す事をしないだろうとも考える。これは彼女の不実でもなければ、彼女が自らにその力なしと考える故でもない。恐らくは、これが彼女の純粹さなのである。彼女の克己は、他人に手を差しをばす事さえ自分に許さない。逆説的に言えば、絶対的に孤独の場を守って、容易く人を救おうとせぬ事こそが、Sibylle の愛なのである。その厳しさが、私には充分に実感し得たとは言いが、畏敬すべきものに思われる。Angermann は Sibylle のこの厳しさを次の様に観察する。„誰が、彼女ほどに他人を迷路から導きいだす天命を享けて居るだろうか。然し、決して彼女はそれをしないであろう。どんな猛獣であっても、苦

しんで居るなら喜んで救おうとする彼女、魔女 Kirke とは反対に、物言わぬ動物に人間的なものを吹きこもうとする彼女は、超感性的なものに到る道を、私に示す事はあるまい。それを彼女は、自分自身の為にとって置くのだ。その代わり彼女は、爾余一切のものを断念する。かくして、彼女は自分の位を主張するのだ。何故なら、要求なき者の足許に、すべてはひれ伏すからである“。

(Wer aber schiene so berufen, einen anderen aus Labyrinth her auszuleiten, wie sie? Ach, das wird sie niemals tun; sie, die jedem bedrängten Raubtier gern zu Hilfe käme und, eine umgekehrte Kirke, der stummen Kreatur das Menschliche einhaucht, sie würde mir den Weg ins Übersinnliche nicht zeigen. Dieses hat sie sich selbst vorbehalten; dafür verzichtet sie auf hundert andere Dinge; so behauptet sie ihren Rang; denn dem Bedürfnislosen wird alles zu Füßen gelegt. S. 361-362).

Angermann は、その Gesinnung に於いて、Sibylle にある種の親近を感ずる故に、殆んど畏敬に近い敬意を払いながらも、彼女に対しては、いくらかの距離を置いて居る。それは嘗てある海岸で見た美しい小石を思い出させる。ただ落ちて居るように見えるその小石は、拾い上げようとするれば、どれ程指に力をこめても離せない程、しっかりと黒い岩床について居るのだ。更にそれは無意識の中に Sibylle の世界への反抗となり、彼には動物がますますうとましくなると、再び植物界へ戻ろうとする。Sibylle は Angermann よりもむしろ Cordula に対して愛情を感じて居るようである。Cordula の周囲に漂う無碍の世界が、Sibylle にはいとおしむべきものに思われるのであろう。

この Sibylle が、その友と Angermann の結びつきを喜ぶのは全く不思議である。恐らくそれは二人の結びつきと言うより、„Barbara の受胎“への願ひであろう。Sibylle のこの願ひは、彼女の純粹な精神性を思えば、極めて奇異の感を与えぬでもない。彼女の中にある母性が、Barbara に具現しようと願うのであろうか。そうではあるまい。それ位の事なら Sibylle は、言わ

ば我慢出来る筈である。彼女の真意はそんな所に有るのではない。Sibylle は Barbara に依る出生の秘蹟を、同時に自分の新生として期待して居るのだ。新しき生命の誕生を、彼女は自分のこれ迄すごして来た苦闘の一生の、点晴たらしめんと願って居るのである。彼女が Angermann に自分の過去を語って、Barbara の助力と、動物達への感謝を述べた後、暫く黙って立ち上ると、傷のない方の手を彼に差し出して、„でも今度は子供が一人出来るのね“。(„Nun aber werden wir ein kind haben“. S. 386) と言って、言葉に詰って真赤になってしまう場面があるが、この乙女のような羞らひは、Angermann への謝辞でもある。Barbara の濶達自在な行動的精神、物言わぬ動物達の忍苦と孤高の姿に助けられて、彼女が辿りはじめた恢復の道が、新しい生命の出生に依って、完全なものになりうる事を彼女が感じとったからに外ならない。自分が放棄した現実へ再び立戻るのが訪れたのだ。勿論改めて現世の塵にまみれようと言うのではない。然し山を降りる機が熟したのだ。彼女の望むのは、純粋な精神となってこの世に住家を持たぬ事だ。然しそれは否定の原理であると同時に、いや、それ以上に無私と純粋の原理に依って、善きものを守って人類の運命に寄与せんとする願いでもあるのだ。そして、それは遂に新しき生命の誕生への期待である筈である。恐らく Sibylle は, Barbra の力強き母性と, Angermann の思慮深さ、或いは前者の明確な昼の世界と、後者の黒闇の夜の世界の結合を、最も望ましきものと感じたのであろう。そしてこの両者の結合に参与する事を、自分の天命とみなすのだ。恐らくは生まれて来る子の世話をし、育て上げて行く役は、最も多く彼女が引き受けるであろうし、又爾余の者達も、それを当然の事と考えるであろう。

V

Cordula

Angermann の妻 Cordula は、三人の女性達の中では一番年長である筈だが、時に無邪気な童女のような、時に一切をわきまえた老女のような、殆ん

ど年齢を感じさせない、妖精めいた所を持つ不思議な女性である。彼女は、相互のこまやかな愛情に依って、Angermannと極めて落ち着いた静かな家庭を作っているが、生来の繊細な気質と病弱から、およそ世俗的な意味での妻と言う実感を与えない。勿論子供は居ない。専ら、二匹の猫の世話と草花の手入れ、近所の子供達の世話、僅かな読書位が彼女の日々の暮しである。Cordulaは心臓が弱いにかかわらず、煙草好きである。彼女は青い煙を立ち昇らせ、後からは強心剤の箱を持ったSimoneがついて歩く。Cordulaはこの青いもやの中に住して、それから一步も出る事をしない。それは夫のAngermannに対してもそうである。それは疎遠と言うのではなくて、外界との直接的な接触は、忽ちにして彼女を傷めてしまうからなのだ。然し、Cordulaのこの孤独の世界は、Sibylleのそれとは随分趣きを異にして居る。Cordulaには、Sibylleのような意識した精神性はない。そして又、その精神性の故の痛苦と言うものもない。Sibylleと違って、彼女はむしろ最初から善き事を眺め、記憶しうる人間なのだ。Sibylleが智の人であるに対し、Cordulaは情の人と言ってよいだろう。Sibylleと同じように、彼女もいきなり現実の中に足を踏み入れる事はしないが、現実への対し方はSibylleのように激しい鋭角的なものではない。Cordulaの孤独は、Sibylleのそれが、絶対的に厳しき方向に向うに対して、むしろ遊戯^{ゆげ}の色合を帯びて居る。それを断念と見なすか、贅沢と見なすかは兎も角、かく自分の領域に引きこもる事に依って、Cordulaは一層他への愛を行なう事が出来るようである。そして、自分の世界をこのように限る事に依って、彼女の豊饒な叡智が生まれて来る。更に又、彼女の弱さに尊厳と気品が備わるのである。村の人達にとって、Angermannの奥さんは、特別な扱いをせねばならぬ女性となるのであり、Sibylleは、別れ際に何時もCordulaを抱擁したような身振りをしながら止めてしまうのだ。

三人の女性の中で、最も近付き難く、或いは難解なのはSibylleであろう。然し、最もふくよかに女性らしく、謎めいた智慧を持って居るのはCordulaである。彼女はひそかに他人の運命の糸をつむいで居るように思われる。し

かもそこには、多少の茶目っ気さえ感じられるようである。彼女は事柄の前面には出て来ないが、いく分かは自分の楽しみの為に、狂言を廻して居るような所がある。Cordula 自身はそれに気付かぬが、Angermann は、一種の讚嘆をこめて、妻のこの不思議な性質を眺めて居る。Cordula は Barbara とは全く質を異にした天真爛漫さを持って居る。„この茅屋が鬼神の訪ねて来るに値するなら、ある暗き神が、外の女達がさかしくも口をつぐんで居る、正にその事を語るべく、彼女を鼓舞する如く思われる事も間々ある。多くの女達は大てい似て居て、自分の夫を試そうとの下心で語るものだ。然し彼女はそうではない。ただ、彼女が如何にひそかに私を事件の中に引き入れて居るかと言う事は、彼女の念頭には浮ばない。いや、何時もただ夢想裡に人生を耐えて行く、この靈的な女性程に、人生と密接に結びついて居る者は居ない“。

(Wäre unsere brüchige Hütte würdig, daß Dämonen sie heimsuchten, so könnte man ab und zu meinen, eine dunkle Gottheit gebe ihr ein, gerade das zu sagen, was andere Frauen schlaue für sich behalten. Manche redet wohl ähnlich, in der stillen Absicht, ihren Mann zu prüfen; aber so ist sie nicht. Es entgeht ihr nur, wie sie mich leise in Begebenheiten hineinzieht. Ja, niemand steht inniger im Bunde mit dem Leben als diese Geisterhafte, die es nur noch träumend erleidet. S. 329).

時に依ると、彼女は全くお伽話の中にでも出て来そうな、現実離れをした女性である。彼女は毎晩火事を心配しては、きな臭い臭いをかぎつけて、そうなると懐中電灯を持って、屋根裏から地下室まで、隅々を調べてからでなければ寝ようとしなない。又、Angermann が、受けとったばかりの恩給を、帰道少年達に殆んど施して来た事を聞いても、彼女は何も言わない。ただ微笑をして、本を読みつけて居るが、思いついて彼に知らせるのは、彼の留守中、黒猫の身に振りかかった新しい事件の話なのだ。彼女も人並に、嫉妬めいた気持を抱いて不機嫌になる事がある。それは Angermann が——自分の夫がと言う程のなまなましさはない——Barbara ではなく、Sibylle を

重要に考えて居ると思い違いをする故だが、そうでない事がわかると、忽ち子供のように機嫌がなおってしまう。Angermann が Barbara と近付いて行く事は、Cordula にとって嫉妬の材料ではない。彼女は Barbara をも Sibylle をも愛して居るが、Barbara は彼女にとって全く異質的な女性である。Barbara の積極的な性格は、Cordula の閉じこもった世界と、丁度正反対である。Barbara が如何に近付いても、Cordula の領域に立ち入る事は決して出来ない。そして又、Cordula は、Barbara のこの断乎とした生き方を、自分達のやや浮世離れした生活様式に、現世的な根拠を与えるものと歓迎して居る。然し、Cordula は Sibylle の中に、非常に自分と似通った性質を認めて居る。両者の志向は全く異なっては居るが、少なくとも、現世的なものから離れた所に住まいする点は共通である。Sibylle は厳肅な形で、Cordula はややわがままな形で。恐らく二人は、それ故にお互いを身近に感じて居るが、同時に Cordula は、自分以外にも超地上的なものの存在する事を、余り我慢出来ないのである。それは Sibylle への意地でも反撥でもない。Cordula の繊細さは、他人に余りよく理解されるだけで傷がついてしまうのだ。彼女は、人間と通じ合う事に依ってほろびてしまう妖精の、かげろうのようなはかなさを持って居る。恐らく、Angermann の思いやりある無関心が、Cordula には最も嬉しい、そして我慢の出来る関係なのだ。Angermann が Barbara に近付くのは、彼女の領域外の事である。然し、もし彼が Sibylle に接近するなら、如何に彼等が思慮深く振舞うにしても、それは直ちに、彼女の世界に他人がずかずかと入り込んで来る事になる。彼女はそれが我慢出来ないのだ。それは嫉妬とか、独占欲とか言^{たま}った生なものではない。むしろ誇りと品位の問題であろう。Cordula の世界が他にはない事を、Angermann が認めて居る事さえわかればそれだけでいいのだ。

空に白雲が一、二片浮んだだけで雷雨をかぎつける程に繊細な彼女の世界に、出入りを許されるのは、専ら子供達や小動物達であるのは不思議な事ではない。彼女は、村の子供達を家に集めては、様々な綺麗なものを与え面倒を見てやる。そして、その小遣いを預って子供銀行を開き、そこから酒手を

ねだりに来る父親達に対して、厳しく子供の財産を守ってやるのだ。化物を見せられて、おそれて啼きつづける猫も、彼女が慰めて漸く啼きやむし、Angermann に依れば余り感心出来ぬ娘 Simone も、Cordula の教化で小さな淑女となる。

然し、彼女は同時に又、極めて厳しい、殆んど行動的と言ってよい程、実際の判断の持主でもあるのだ。この巻の最後、入水した若い女の屍体の処置のエピソードは、この病弱な命令者の姿を見事に示して居る。„その時、誰かが叫んだ。『Angermann の奥さんがやって来る。』本当に、家の庭から赤い絹の寝間着に粗毛の襟巻をまいて、青い煙を空に吐きながらゆっくりと近付いて来たのは Cordula だった。煙草と強心剤の箱を捧げて、Simone が後からついて来た“。

(Da sagte jemand: „Jetzt kommt die Frau Angermann“, und wirklich war es Cordula, die sich von unserem Garten her, den Lodenkragen um ihren rotseidenen Schlafrock geworfen, bläulichen Rauch in die Luft blasend, sehr langsam näherte, gefolgt von Simone, die das Kästchen mit den Zigaretten und den Herztropfen trug. S. 426).

彼女は、皆が尻ごみするのをかまわず、検屍の為に我が家の玄関を平気で提供する。子供が駆け寄って来て、大声に叫びながら屍体を指さした。„然し、Cordula は坐ったまま、その手をおさえて下させた。『死んだ人を指でさしたりしてはいけません。』と彼女は言った。すると少年達は、彼女の命令を待つかのように、石の椅子のまわりにみな集った“。

(……; doch bog ihm Cordula, ohne aufzustehen, den gestreckten Arm nieder. „Man soll nicht mit Fingern auf Tote zeigen,“ sagte sie, und nun sammelten sich alle Knaben um den steinernen Sitz, als erwarteten sie einen Befehl. S. 427).

彼女は、屍体を入れて家のけがれる事をおそれる女に言う。„家の事なら私は心配して居ませんのよ。Schildberger の奥さん。こう言う場合は、何と言っても、その時に頭に浮んで来る考えだけが、何時も大切な事なのです。

死んだ人は、私たちの所にとどまって居ようとはしないで、出来るだけ早く、別な方へ行ってしまいたがるものです。私たちが、死んだ人に親切にすればするだけ、その旅路を楽にしてやれるのです。勿論、自分がこの憐れな死んだ娘さんよりいい人間だと思ってる人は、この娘さんを自分の納屋や家の中に入れない方がいいでしょう。この娘さんは、その人にさっと息を吹きかけて、心の中に悪い考えを起させるかも知れませんからね。だけどそれを思い切って引きうけて、死んだ人に少しでも尽くしてやれるのを恵みと考える人には、決して悪い事など起きませんでしょう。私達の国では、もう何千年も昔から、死んだ人が感謝する、と言う事が信じられて来て居るのです“。

(„Mir ist nicht bang um unser Haus, Frau Schildberger; es kommt in solchen Sachen doch immer nur auf die Gedanken an, die einem dabei durch den Kopf gehen. Wer einmal gestorben ist, will sich nicht bei uns aufhalten, den ziehts mit aller Kraft woanders hin; das dürfen Sie glauben. Je freundlicher wir zu einem Toten sind, um so mehr erleichtern wir ihm seine Reise. Wer freilich meint, er sei viel besser als etwa die arme Kleine da, der soll sie lieber nicht in seinen Stadel oder gar in sein Haus aufnehmen; sie könnte ihn schnell noch anhauen und in seinem Herzen einen bösen Geist aufwecken. Wers aber über sich brächte und sähe es als eine Gnade an, daß er ihr einen geringen Dienst erweisen darf, um den stünde es nicht schlecht. An ‚dankbare Tote‘ hat man in unserem Lande schon vor Jahrtausenden geglaubt“. S. 427-428).

平易なこれらの言葉の中に、断乎とした、犯し難い Cordula の気品が示されるが、彼女にとっては、此岸と彼岸の境界が、それ程厳密なものではないようである。それは彼女の意識的な思弁の結果ではなくて、彼女の元来の性質であろう。Angermann に依ると、„Cordula の第一の感動は、常に驚きとあわれみである“。(……; ihre ersten Regungen sind immer Erstannen und Mitleid. S. 309) この、目を見はった子供の様な純粋なやさしさ、殆んど無邪気と言っている感動の持ち方が、彼女にこれ程の智慧と尊厳を与えて居る。

この小説の中には Cordula は余り登場して来ない。然し、時空を超越したような、如何にも軽やかな彼女の姿は、この作品のどの場面にも見えがくれて居る如く思われるのである。それは決してうかがうようにはない。そうではなくて、むしろながすように、はげますようになるのだ。すべての事が、Cordula の認可をうけてはじめて全きものとなる。常識的に考えれば、彼女は夫に裏切られた妻と言う事になろう。然し、彼女にそのような恨みがましい意識があるわけではない。更に、夫の情事に無関心と言う程、独りよがりな引きこもり方をしてるのでも毛頭ない。そうではなくて、彼女は自分が背景に退く事に依って、他を一層前面に押し出して居るようである。むしろ彼女は、Angermann と Barbara の接近を意識的に押し進めて居るらしい趣きがある。Barbara が訪ねて来れば、帰りには送って行くようにすすめ、又、彼が Barbara を訪ねるようにしきりにすすめるのも Cordula である。家の改装をする間、Angermann は Barbara の屋敷に移り住むが、Cordula は当然のように家に残る。そしてそれに依って——品の悪くなるのを恐れずに言えば——彼女の思惑通り、Angermann と Barbara の結びつき、そして受胎と言う事が起るのだ。矢張りこれは不思議な事である。作品の世界をすぐ自己の周囲の事象に具体化してしまうのは幼稚な業だが、実際に若しこう言う事が起り得たなら、我々は恐らく奇異の感以上のものを持つに違いない。然し、この作品に於いては、それが何の無理もなく、殆んどそうあるべき事として成り立つのだ。これは不思議な事なのだ。恐らく余り簡単にここはわかかってしまっただけとはいけないであろう。

„Barbara の財産すら、Cordula は偶然的なものとはみないで、それを何か他の才能と同じように、時には遺伝し、時にはそうでない特性だと言うのだ。そして、遺伝してうけつがれたのでない場合は、一切の所有物は簡単にとび去ってしまうだろうと言う。此の間も彼女は、話しを終える時に、一言不思議な事を言った。Barbara が関係する事は、必ずよい結果に終わらぬわけには行かないだろうし、そしてその際、誰も傷つく事はないのだと“。

(Sogar Barbaras Reichtum läßt sie nicht als etwas Zufälliges gelten, sondern bezeichnet ihn als eine Eigenschaft, die sich wie irgendeine andere Tüchtigkeit manchmal vererbe, manchmal nicht, und im letzteren Fall flögen alle Besitztümer einfach davon. Seltsam war ein Wort, womit sie neulich ein Gespräch beschloß. Eine Sache, an der Barbara beteiligt sei, meinte sie, könnte kaum anders als gut ausgehen, und niemand werde je dabei zu Schaden kommen. S. 328).

Cordula のこの判断は当たって居よう。然し、そこから Angermann と Barbara の同衾を容認するまでには、随分距離のある事である。勿論、Cordula を妻と言う形を借りた霊的なもの、人間同志の高次な結合を促進する超地上的な存在と考えれば、図式は極めて簡単に成り立つであろう。然し、矢張り Cordula は人間なのだ。たとえ、はっきりと意識しながらでなくとも、事を人間の眼で眺めて、よしとする判断が有るのでなければなるまい。然し、そのの所はもう人間の言葉で語り得ぬ事であるらしい。

若しこのような役割を持たされた Cordula に、いく分なりと苦悩の姿が見られるなら、事は簡単に我々の理解の範囲内におさまる。然し、Cordula の面持ちには、いささかも苦悩、或いはその克服と言った悲劇的なかげは見当たらない。今の私には、Cordula という女性の姿が、無時空の遍在、愛、と言う事を感じさせるだけで、彼女の行なう秘蹟が解明し兼ねるが、読む毎に、背後に引っこんでと思われた彼女の姿が、実感をもって明るく大きくなって来るようである。異数の女性と言うべきであろう。恐らく Angermann も Barbara も、Cordula の愛を全身に感じて居るのだ。それ故に彼等にも、自分達の行為への確信が生まれて来るのである。Angermann は、その終生の伴侶としての罪の自覚と共に。Barbara はもっと単純に、現実の自己の立場の自覚と共に。そして、更にそれ故に Barbara が、Cordula と Sibylle に、二人の子供の代母となって貰えたらと言う、考えように依っては極めて厚顔な願いを抱き、それを聞いた Angermann は、その言葉をそのまま自分の願いと感ずるのだ。

VI

以上、Angermann, Barbara, Sibylle, Cordula 四人のそれぞれを、やや詳しく見て来たが、その思いは異なって居ても、彼等の何れもの願いと期待が、ひとしく新しい生命の出生と言う事に向って居る。Cordula だけが、その事を知っては居ないようであるが、彼女とても夫 Angermann に、Barbara への道を、恐らく無意識にと言うよりはもっとはっきり示して居るのだ。この書の Titel である „成熟した生“ (das reife Leben) とは、勿論、Angermann のみに関しての事であろうが、このように四人のそれぞれを眺めて来れば、それは、彼等の相互の Situation の上に成り立ってるとも考えられよう。Angermann は、その内部のそそのかす声に従って闇の道を歩かんと決意し、女性達は、それ自身超時空的な母性に導かれて、男の心の中の声を聞きとり、それが善き声か、悪しき声かを本能的に聞きわけるに違いない。そして三人の女性が、それぞれに智、情、意の世界をわかちもちつつ、Angermann の暗い道を照らして居る。相互の思いは、結局、„愛“ と言う事であり、互いが互いに負うて豊かになって行く。全く人間の言葉に直して言えば、すべてのものの欲望が、完全に自己を充足しつつ生みの行為へと向って行くのだ。

然し、本題は矢張り、Angermann の内部に戻らねばなるまい。

Angermann を内から駆り立てるもの、それが何であるかを答えるのは容易いと言った。いく分でもその間の消息に通じて居るものには、Dämon と言う言葉を思いつくのは難しくない。然し、それをただの単語でなく、真実の答えとなし得る為には、我々の実感が問題となる。恐らく、それは言葉で授受出来る概念ではないであろう。我々にとって、それが単なる教養語以上のものになるのは極めて困難なように思われる。Carossa が Dämon の力をすべて解明し得ると考えて居るのではあるまい。然し、彼はこの作品で、敢てその難しさに立ち向おうとして居るのである。この書は、Angermann の省察の記であるが、それが単なる書齋の智慧に終わって居ないのは、彼の省

察が、結局、自己の内部に棲む Dämon の声に耳傾ける事（更に Dämon の導きに従って、衝動に身をまかせて行こうとする事）を意味するからである。先に彼の現在の境地を、老年の諦念ではなく、むしろ予感に満ちた動的な状態であると書いたのは、その事を示したかったからなのだ。

自己の経験智をもって、心内のそそのかす声を統禦するも、人間に与えられた難い業である。然し、統禦しようと信ずるは思い誤りであろう。恐らくそれは成熟ではあるまい。むしろそれは枯死につらなるものである。更に又、それが統禦しうる程度の力しか持ちえないなら、矢張り我々の生命は枯渇してしまふであろう。自己内部の声——それは殆んど暗黒の力として現われる——を、既にもう個人の力の遙かに及ばぬ根元的なものとして畏敬する。その意味で、自己を大地の力にまかせる決意をする事こそが、成熟した生の智慧——Carossa は秘密と言う。智慧を放擲する事に依って生命の得られる不思議である——であるように思われる。勿論、私にこの事が充分わかって居るのではない。予感的にこう言いたいのであるが、それが最もいとうべき図式的な判断に終わる事をも又私はおそれる。

我々はしばしば、年を取るにつれて迷妄から離れうるものと考えがちだが、どうもそれは誤りのようである。むしろ、年と共に迷いは深まり、同時に生命にかかわるものとなって来るらしい。ただ、青年と違って、迷いに依って惑わされる事は少なくなるとは言い得るかも知れない。青年時代の迷いが単音的であるに引きかえ、中年以降のそれは遙かに複雑である。恐らく、我々は年を重ねる毎に、事柄の平明な単純さを喜ぶようになるが、生そのものを、この単純さで安易に割り切り去る事には、益々懷疑的になって行くからであろう。年数を経るにつれて、我々が人生に与える解答、或いはそこから引き出す解答は多くなる。出鱈目な方程式を黒板一杯にながながと書いた、あの気遣いの老教師の言葉で言うと、*„解法は無数にあるのだ“*。(……; er aber versicherte freundlich, ……und es gebe unendliche Lösungen. S. 339) 恐らく、筋を通したい年代には、ただの曖昧としかうつらぬであろう。然し、解答が無数にあって、しかもすべての解答が真実であり得るだろう

事、言わばその混沌たるはかり難さから人間の生が成り立ってるだろう事が、必ずしも自分の不決断の言訳としてでなく考えられるのも、齢を重ねたものの持ち得る特権かも知れない。逆に言うと、それは又大人の覚悟でもあり、何れの答——何れの迷いを選んでも、そのまま責任を負う事になるのだ。一步誤れば無際限の闇となろう。然し、その闇をおそれて身動きせぬなら、人間は遂に生そのものを得ずに終わってしまうかも知れない。足許から延びる無数の道の何れを選ぶか。老年に到っての決断は、若者のそれにくらべて遙かに困難である。何れの道をとっても一応の辻妻はあわせ得よう。然し、それが高度の目的と合し得ぬ限り、彼は充実した思いを得られまい。年多き者は或る意味で神に似て来る。彼の一つ一つの行為が完成でなければならぬのだ。引き返すにはもう時間がない。然し、ここに到れば、もう有限的な個人の意識的な商量、意志の力だけではどうにもならぬ事である。それらのものを否定するのではない。ただ、決意する為には、人間は個人の中であって、しかも個人を超える大きな力の差し示す所に従わねばならぬように思われるのだ。Faust は常に我々の大問題であり続けるであろう。恐らく、個人の意識、意志が整合の方向に向うに対して、この力は、初動的には破壊に向うかも知れない。然し、この壊す力への畏敬を抱かぬものは、矢張り打建てる事も出来ぬであろう。

Angermann が自分の過去を不満足なものと見なして居るのではない。恐らくは、誤りなく、戦争の苦難を経ても大きく乱される事なく過し得た一生に悔いる所はないであろう。観照にあけくれる現在の隠遁生活が、自分の人生の完成と考えてよい筈でありながら、矢張りそこにとどまり得なかったのは、人間の心の持つ不思議な Dynamismus と言うべきであろうか。しかも彼が踏み入って行くのは、最も容易にして最も困難な Eros の世界なのだ。性の世界はそれ自体として眺めるなら何程の事も無い。あげつらえばあげつらう程、軽薄なものになる。Carossa がつとめて筆を抑えて居るのは、その危険を承知して居るからであろうし、又彼にとっては、Eros に依る解放風な安っぽさが全く無縁だからである。

Angermann が日々の平穩に不満だったのではないが、おそらく彼はこれ迄の Cordula との生活から、生の充実と言う実感を十分に持つ事は出来なかったのだ。端的に、それは Cordula が夫に子を与える女性ではないからである。妖精めいた Cordula の超感覚的な軽やかさは、Angermann の人生の道を照し出す明るさは持つが、彼に放射して燃焼を全からしめるに十分な熱量を持ち得ない。それは Cordula 自身がよく知って居るようである。彼女が殊更にも Angermann を Barbara の方へと向けるのは、Barbara の胎内にこそ、自分の持たぬ土壌のぬくもりがあると考えからなのだ。Angermann も Cordula のこの高貴な稀薄さを知って居る。然し、決してそれを物足らぬと思うのではなくて、彼女の気品と智慧に対して、常に愛情とそして敬意を抱いて居るのだ。若し彼が妻に不満であるなら、彼の Barbara への接近は忽ち次元の低い愛欲になり下ってしまうだろう。Barbara との結びつきは Angermann 自身の内部の問題なのである。ただ、Angermann の妻が Corudula 以外の女性であったなら、事情は全く異なるものになって居たろうとは充分考え得る事であり、二人の結合はおそらく起らなかったであろう。

Barbara との出会いが劇的な効果を持つ為には、Angermann は既に年をとりすぎて居る。元来、彼にはそのような Romantizismus はない。彼の情熱はむしる思慮反省の形で現われるのである。然し、Barbara の如何にも大地とつながった、確実な姿は彼の心内に久しくひそんで居るもの、日常茶飯を越えて行為へと駆り立てるものをよびさましたのだ。勿論、それは他に依ってのみ触発されるものではない。本来内発的な、個々人の生命と結びついて、常に持続を願う生を破壊しつつ、絶えず地表に浮び出ようとする暗い力なのだ。生涯、その声を聞く事なく終わるものもあろう。その力を怖れるのみで、耳傾ける事をせずに終わるものも居よう。或いは、ひたすらその声の命ずるままに赴いて破滅するものも居よう。その間の消息は Angermann には親しいものである。彼は書く。„子供の時には、しばしば、ある時間が二度と繰返されぬ事を特に強く感じたものだ。そんな時、我々は現在の状態をどうか永遠に変える事のないようにと神に祈ったものだ。そして今でも又、

それと似たような事を我々は願って居る。諸々の力が、そのままにとどまり、一つは他に依って榮えて行くように、しかし如何なる力も、その鎖から解きはなたれる事のないようにと。焦慮は生の晴着にしわをつける。この事を、我々は経験でよく知って居り、そして必ず静けさを守らんと自分に言い聞かせる。然し、その同じ子供が静かな池を見ると、必ず石を投げ込んで見たくてたまらない誘惑を感じたものだ。そして、この騷擾をひきおこさんとする衝動がなければ多分存在の進行も停止してしまつたことであろう“。

(Als Kind spürte man oft so stark das Unwiederholbare gewisser Stunden; dann betete man zu Gott, er möge doch an dem gegenwärtigen Zustand ewig nichts ändern, und etwas dergleichen erlebt man auch jetzt. Mögen Kräfte Kräfte bleiben, möge eine an der andern wachsen, doch keine sich entfesseln! Ungeduld bringt Falten in das Festtagskleid des Lebens; darüber hat man seine Erfahrungen und gelobt sich Stille. Aber das nämliche Kind konnte doch keinen ruhenden Teich sehen, ohne daß es den Reiz empfand, einen Stein hineinzuzwerfen, und ohne diesen Trieb zum Unruhestiften hörte wahrscheinlich der Gang des Daseins auf. S. 331)

敢えて平静を捨てて、騷擾を起さんとする衝動がなければ、生命の進行も止つてしまつたであろうとする Angermann の省察は、そのまま彼の人生に対する自覚的態度である。それは、理否、善悪、或いは損得勘定をも超えたものである。この衝動は多く条理をそれようとするが、それは条理を捨てるのではなくて、条理に代用されて枯渴する生を毀ち、そしてそれを救わんが為である。然し、この衝動に従うは、時に自己に属する一切を放擲せねばならぬかも知れぬ。その危険を承知しつつ、しかも内なる声に耳を傾けるを敢へと見るか、無分別と見るかはわかれるであろう。両者の差異は、その間に一髪も差しはさみ得ぬものなのかも知れぬ。しかも Angermann は、老年に及んで、更に十全な生の体験を得るべく、敢えて、ひそかに年来の妻 Cordula を離れて、Barbara と結ぶのである。

然し、Angermann は内部からのこのそそのかしを無反省に受け入れるのではない。けだし、無限に吟味する自覚と思慮の深さがなければ、この騷擾

への衝動は、ただの恣意に終わってしまうであろう。彼の心の内部には、常に、余り近付くなと囁く声も聞かれるのだ。彼は又、自分の行為に思い上りを抱く事もない。Dämonの導きに従おうとも、行なうは人間の業である。敢えて踏み入ったErosの世界は、既に用なき筈の余りにも人間的な苦悩をさえ彼に強いる。独占欲、嫉妬、罪悪感。それらのどれ一つとして無しではすまぬ。そして彼はそれら一切からも決して眼をそらさぬ。時には、Barbaraから贈られた高貴な濃青色の茶碗を、こなごなに砕く儀式すら必要だったのだ。その茶碗は、Angermannの讚嘆の眼差しを見てとったSibylleの小声の提案を、Barbaraが力をこめて同意して彼に贈ったものなのだ。Erosを断念したSibylleのAngermannへの好意。それを無心に喜ぶBarbaraのSibylleに対する愛情。その愛情へのAngermannの焦燥。Sibylleに欲はなく、Barbaraにすら欲はない。ただAngermannのみが、彼のいわゆる „心内の小さな暗黒の部分“ (das kleine dunkle Feld in meinem Innern S. 355) に、この無欲の照射を受けて、殆んど肉体的にも発熱するのだ。老年の彼にとって、時ならぬ愛情の悩みはいたいたいだが、彼はそれが決して綺麗事に終始するものでない事は承知して居る。遙かに次元の低い愛欲の姿と外見的には変りなからう。その間に生起する感情も同様である。本来的にそれが罪物的なもの、いや罪である事は、彼が敬虔に自覚して居るのである。

然し、彼が如何にその罪過性を意識しようと、そこから退く事は既に考慮の外である。むしろ罪であればあるだけ、猶一層それに身をまかせて居るようである。勿論、罪がただちに救いの道であると言う単純な逆説を振りかざすのではない。然し、大地に結びつけられたものにとって、罪をおそれつつ高きに到らんとするは、怯懦かつ僭越なりとするのも彼の自覚的な判断であるのだ。その故に、遂に悔いの言葉を彼から聞く事はない。身勝手な話と言う事にもなるが、それは事の性質上致し方ないことである。人が内部からうながされて行為に赴く時、外から見てその行為の内発性を計る基準が何処にもないからだ。説明は本質の低下を招くだけである。皮相のみより見えぬ眼には、Angermannが物わがりのいい好色の老紳士としかうつらぬとし

ても、それに対して有効な抗弁のしようはないのだ。作者が、篇中罪についての省察を置きながら、決して Angermann に悔い、償いの言葉を吐かして居ないのは、当然の事ではあるが賢明な、すがすがしい事である。割切った言い方をすれば、dämonisch な力とは罪につながって、悔いにつながるものではない。然しなお、それが単なる恣意に過ぎぬものでないかどうかをきめるには、Angermann の取る態度に依って見るより外はない。彼は一度は観察者の立場を捨てた。然し、彼は行為に埋没して、観る事をやめるのではない。常ならば悔いの言葉の来るべき所に、彼は更に深い省察を置こうとする。衝動に従って、しかも衝動的に振り舞うのではない。本来的に眼の人間である彼は、つとめて冷静にすべてを——自己をも含めて、眺めようとして居る。この一篇中での発展を考えれば、その省察は個人的なもの、身辺雑記風のものから、益々本源的なものに向って行ったと言ってよいであろう。彼自身が魔法の小枝となって、存在の底へ降り、生命の泉を探し求めるのだ。目に見えぬ所で行なわれる受胎、生成の秘密、性の世界に就いての省察が述べられる。そして彼は、この泉から生の意味を汲み出そうとするのである。彼は直ちに生の意義づけをしようとするのではない。ただ、生の意味を、もっと根源的に生成の不可思議を探る事に依って、地上の生が無意義に終わるのをとどめようとするのだ。女性と結んで我が子を得たいと思うのも、畢竟するに同じ願いである。それは多分に迷いであろう。然し、迷いの道を通らずして大地の底に降り得ると考えるのは愚である。ただ、その闇の世界から再び地上に立ち返る時、何を得て来るか。迷いが迷いのままに終わるか、個人を越えた人類の運命への参与になるかを定める契機はここにあるのだ。

Angermann は、上質の陶器が出来上るためには、陶土があなぐらで、長い間腐蝕し、分解醱酵と言う過程を辿る事を知って驚き、又小さな球根の持つ不思議な生成力に殆んど戦慄を禁じ得ない。この小さな手のような球根の中に、生命にとって重要なものはすべて凝集して居る。そしてこの球根は、冬中を地下で眠りながら、その核心に於いては既に将来の全体の型態を考えて居るのだ。更に、極めて難解な同衾の秘蹟への省察がある。如何なる認識

も商量も、又如何なる高説も呪文もなし得ぬ事、一つの新しい生命を創り出すのは、あの盲目的な陶醉に於いてである。然し、この陶醉の中にあつて男は孤独である。太初的な母性に導かれて、女はやがて生まれ出る子を自分が愛するだろふ事を知つて喜びつつ眠る。然し、男は目ざめ、自分の踏み入つた性の領域が、如何におそろしきものであるかに気付き愕然とするのだ。それにくらべれば、„人類の調和的秩序が住むのは、真紅の世界劫火の焰に取り巻かれて永遠に脅かされて居る、僅かに拓いた島の上に過ぎない“。

(— o, nur wie auf ausgesparten Eilanden wohnen die harmonischen Ordnungen der Menschheit, ewig umdroht von den purpurschwarzen Flammen des Weltbrandes, den Islands alte Lieder weissagen. S. 367-368)

今や Angermann は生の最も深い底に降り立つのである。生命を生み出すこの愛の領国は、常に黄泉とひそかな交渉を保つて居るのだ。女性は自身生むものとして、おのづからに生へと立ち返る。然し男子は。彼はこの恐怖を畏敬に変えなければならぬ。衝動に従つて愛の領国に降りたものは、何時かは贖罪をせねばならぬ。Angermann は男子をして、(自己をして) かく決意せしめるのである。„何となれば、彼は中途にとどまろうとはせず、太初の母の闇黒をつき抜けて、明るき創造の真昼に立ち返ろうと欲するからである。彼は光の道を築く事を助けよう欲する。この光の道は、あの暗い沈潜の度が深かつた如く、高きに向うべきものである。恐らく、今日未来を予感する女性が男から期待するものは正にこれであろう。全世界をあげて決断を迫られる来るべき嵐の時代に於いて、全く自分のものになり切つてしまうような男の中に、女性は如何なる支えを見出す事が出来ようか。彼女は、男が自分の眠りと彼女の眠りの間にそれを置くべく、研ぎすました剣をてづから彼に与えるであろう”。

(Denn er will nicht auf dem halben Wege stehenbleiben, will durch die urmütterlichen Verfinsterung hindurch zum klaren, schaffenden Tag zurtück. An einer Lichtbahn will er bauen helfen; die soll so hoch emporführen, wie das dunkle Versunkensein tief war. Vielleicht ist es gerade dies, was heute die zukunftsahnende Frau von ihm erwartet.

Welchen Halt fände sie in der kommenden Sturmzeit planetarischer Entscheidungen an einem Mann, der völlig verfehle? Sie selbst wird ihm das geschliffene Schwert reichen, daß er es lege zwischen seinen und ihren Schlaf. S. 368).

非常に厳しい言葉である。彼は、時代を世界的決断の時と見なして居るが、それを単に特定の一時期とのみとらえてはなるまい。それは常に人間の生きる場そのものなのだ。もっと限定して言えば地上と言う事である。彼は Dämon の呼び声に従って、混沌たる Eros の世界に降りて行くが、願う所はこの地上に明るき道を築き上げる事なのだ。その光の道を歩むのは彼ではないであろう。いや誰でもない。辿るのは受けつがた人間の叡智である。人類の内にひめられた未来への志向、それへの希求と確信である。

数々の彼の省察は一つの願いとなって、やがて生まれ出る子への挨拶となる。それは巻末に置かれる „未生の子へ“ (An das Ungeborene) と題される一篇の長詩に示されるが、Angermann の辿る迷いの道も、結局はこの未来への呼び掛けなのである。彼は、未だ性もわかたれぬ未生の子、しかしかの球根の如く、太初の叡智を裡にいただくわが子に、その叡智を人の世に守り伝えて行く事を願う。父はその子に餓けするものを知らぬ。然し彼は自分を „護る者“, „壊す者“ (Pfleger und Vernichter) の何れでもあると言い、その両者への芽をふたつながら子供の中に沈めようとするのだ。力強い母性がお前を育てるだろう。然し、それのみを恃んではならない。お前は又巫女 (Sibylle) の愛に護られるのだ。父である私の姿をお前は見失ってしまうかも知れない。私は思うにまかせて山を越え、街をよぎって、行き逢う旅人をお前と思って挨拶をしよう。彼は、その子が人間の喜怒哀楽の世界に往って、その喜ぶ所を喜び、その悲しむ所を悲しみ、愛しそして愛される事を願う。

然し、平和の日々は長くは続くまい。やがて故知らぬ恐怖がお前の足をとどめる事があるかも知れぬ。 „お前の周囲を見ませ！最も深き怖れが我々を取りかこむ所は／しばしば又、魂の国へ到る門口に全く近いのだ。／その時、突如お前の中の永遠なるものがお前を見つめる。／そして、それがひそ

かに囁くなら、その導きに耳傾けよ。／お前は死者の言葉を解するに到るであろう。／生くるものの声を検するもその言葉に依ってなのだ“。

(Hier sieh dich um! Wo uns die tiefste Furcht umfängt, /ist oft ganz nah der Eingang in ein Seelenreich. /Was in dir ewig ist, auf einmal schauts dich an. /Und wenn es leise raunt und rät, so horch! Du lernst/die Sprache der Dahingegangenen verstehn. /An ihr prüft man die Stimmen der Lebendigen. S. 443).

これは正に Angermann が決意した道である。彼は決してわが子に安穩を願うのではなく、苦難に満ちた内部への道を辿る事をすすめるのである。然しその苦難の道を行く事に依って至純が得られるのだ。„今こそお前の血の中には、お前を常に／誤りに充ちた生から、より純粹な生へと導く響きがある。／そのお前を、何が更に手痛く妨げ得よう。わが子よ。／誰がお前を辱しめ得よう“。

(In deinem Blut ist nun ein Klang, der immer dich/aus falsch gemischtem Leben in ein reineres weist. /Was könnte dich noch ernstlich jetzt verstören, Kind? /Wer dich erniedrigen? S. 443).

然し、それはもうただ俗に従って日々をつむいで行く生ではない。辛い孤独の、世に背いた日々かも知れぬ。然し、苦難の時代にあつて救いの言葉を発し得るのは、この世に背いた人なのだ。それ故に人が勝利を祝う時にお前はかくれて居なければならず、人が怒る時、お前だけは怒りを忘れねばならない。そして、すべての人が既に忘れ、捨て去ったものを拾い集め、ひそかに守りかくす事を願うのだ。彼は、嘗て戦乱の日々、村の牛をひそかに守り通した遠い祖妣の話しを語る。

父は子に委託せんとする。何を。更にその子が、次の世にこの委託を伝える事をなのだ。形相は様々に変わるであろう。Angermann は自分を „壊す者“ とも名付けて居る。又、父はその子供が如何なる人間であるか知り得ない。自分の仕事に反対する心を、闇の中から呼び起す為に、暗い女性の胎にその種子を置いて来たのかも知れぬ。然し、平板な持続はやがて生命を枯渇

せしめるに違いない。多端紛難の人の世に、ただ肯うのみの精神を呼び起す事は余りにも臆病に過ぎるであろう。おのれの欲する形相をえらぶはよい。然しその為には、絶えず古き泉の底に降りて太古の智慧を得る事を父は子にすすめ、更にそれを未来に伝える事を願うのだ。

人生は無意義にほろびるものでもあり得よう。いや生そのものが無意義なのかも知れぬ。それはわからぬ事である。特に現代、変則的な平安に慣れて、人間は生きる事の意味を見失いがちである。Angermann のひそみにならって、身を挺して大地の底にくぐる事に依って、その意義を見出し得ると確言するのも、非常に勇気の要る事である。然し、その辿る道が、たとえ迷妄、罪過の相を呈しようとして、この未来の子への祈念がそれに結ぶ時、決して彼を誤らしむるものでない事を、Angermann は予感して居る。そして作者もそう考えて居るのだ。死すらも、もう悲しむべき破滅ではなくなるかも知れぬ。Carossa はそれのみを真として断言するのではない。然し、彼は大地の理法を大きくかかげ、人が果敢にそれに迫らん事をすすめるのだ。直ちにそれに従うかどうかは、各人の思量にまかされよう。ただ言い得るのは Angermann の歩む道、そして彼の齎す数々の省察が、我々の無拘束を正し、生のあかしを立てて呉れるかも知れぬと言う事である。恐らく、このような弱い把握のしかたは、この作品乃至作者の本意ではないか知れぬ。然し、この書は、人間が無気力、無秩序におちいりがちな時、常に決意へと我々をばげまして呉れるように思われる。

(昭和 45 年 5 月 20 日受理)

註

Text は Insel 版の Hans Carossa: Gesammelte Werke in zwei Bänden (1940) の第一巻を使った。引用文の数字はその頁数を示す。

参考文献は、手塚富雄著 „地底の消息“——カロッサの成年の秘密について——(ドイツ近代詩人論所収。未来社刊 昭和二十四年)である。この論文は小さなものだが、実に力強くこの作品の本質をつかんで居る。それに比べるなら、本篇は全く蛇足に過ぎない。